

異文化コミュニケーション

NEWSLETTER

No 2
July 1988

KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
Intercultural Communication Institute

神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
〒260 千葉市若葉1-4-1
(phone) 0472-73-1233

“Rhetoric: East and West”会議に出席して

南山大学教授 岡部 朗一 (談)

東洋への関心が高まりつつある現在、レトリックの分野にもその兆しが見られる。去る6月12日から18日まで、ハワイの East-West Center に於いて “Rhetoric: East and West” 国際会議が開かれた。東西のレトリック研究者20名が招待され、その共通性と異質性について議論が展開された。日本から招かれた南山大学の岡部教授に会議の様を語って頂いた。

レトリックの東西比較と題した国際会議はこれが初めてで、National Endowment for the Humanities と East-West Center の共催であった。今回の対象は、古代中国(紀元前4世紀から紀元後4世紀)、古代インド(紀元前4世紀から紀元後9世紀)と、古代ギリシア・ローマのそれぞれの古典文献に見られるレトリックの基本概念であった。この時代の中国におけるレトリック研究で最も重要な文献は『文心雕龍』(Wen-hsin tiao-lung)と『文選』(Wen-hsuan)であり、これらの文献の修辞論とインドの古代メタファー論が研究対象であった。米国側の参加者の半数がレトリック研究者で、あと半数は中国とインドに代表される東洋の哲学、詩学、文学、美学の専門家であった。海外からは4名が参加した。

会議の初日は、東洋レトリックの第一人者 Oliver 教授の基調講演で始まり、私がそれに反応する形で発表を行なった。両者とも東洋レトリックへの接近の仕方を論じ、私自身は、今後の研究課題として、東洋独自のレトリックの理論構築、レトリックのカギ概念の東西比較、東西レトリックの相互影響、東洋レトリックの文献研究の重要性を挙げた。二日目以降は各論に入り右記プログラムのもとに議論が進められた。前日までに翌日の発表論文を読んでおく事が前提となっており、かなりハードな一週間であった。

一週間の会議で特に印象的であった発表を挙げると、まず Oliver 教授の基調講演ではレトリックに対する東西の捉え方の相違が論じられた。東西共にレトリックの重要性は認めてはいるが、西洋では重要だからこそ独立した学問分野として発達しているのに対して、東洋では大切だからこそ、総合的な知識体系の一環として扱われ独立した分野にはならなかった、というのが Oliver 教授の見解である。これは、この分野の基本文献とも言うべき氏の Culture and Communication in China and India (Syracuse Univ. Press, 1971) の中心テーマでもある。二日目の“沈黙”に関しては、ミネソタ大学の Scott

RHETORIC; EAST AND WEST

June 12-18, 1988

June 12 KEYNOTE ADDRESS

“An Introduction to the Study of Relationships Among Eastern and Western Rhetorics,” Prof. Robert Oliver, Pennsylvania State Univ.

[Re]Prof. Roichi Okabe, Nanzan Univ., Japan

June 13

“Dialectical Tensions of Speaking and Silence,” Prof. Robert Scott, Univ. of Minnesota

[Re]Prof. David McGraw, Dept. of Chinese Literature, Univ. of Hawaii

“Argumentation in Asian Rhetoric,” Prof. Vern Jensen, Univ. of Minnesota

[Re]Prof. Stephen Owen, Dept. of East Asian Languages and Literatures, Harvard Univ.

June 14

“Ethical Values in Classical Texts: ‘Galloping on to Goodness’ or ‘Avoiding the Scales of the Dragon.’” Prof. Helen North, Dept. of Classics, Swarthmore College

[Re]Prof. Antonio S.Cua, School of Philosophy, Catholic Univ. of America

“Pathos in Classical Texts.” Prof. Mary Garrett, Ohio State Univ.

[Re]Prof. Ding-ren Tsao, Dept. of Languages, National Cheng-Kung Univ., Tainan, Taiwan, Republic of China

June 15

“The Concept of Structure in the Chinese Classics” Prof. Stephen Owen

“Metaphor/Hsing/Pi”, Prof. Kathleen Jamieson, Univ. of Texas

“Literature in China: The Wen Xuan” Prof. David Knechtges, Dept. of Asian Languages and Literatures, Univ. of Washington

“Issues and Approaches to Comparative Aesthetics” Prof. Eliot Deutsch, Dept. of Philosophy, Univ. of Hawaii

June 16

Philosophy/Politics/Rhetoric

Prof. Tim Engstrom, Dept. of Philosophy, Univ. of Hawaii

“The Concept of Genre in East and West,” Prof. Adena Rosmarin, Dept. of English, Univ. of Texas, Austin

[Re]Prof. David Knechtges,

“Eastern Assumptions, Western Politics and the Problem of Jimmy Carter,” Prof. Roderick P.Hart, Univ. of Texas, Austin

[Re]Prof. Roger Ames, Dept. of Philosophy, Univ. of Hawaii

June 17 AUGYTAS/ Propriety

“Body, Soul and the Rhetoric of Decorum in Anandavardhana’s Dhvanyaloka”, Prof. Michael Leff, Univ. of Wisconsin

[Re]Prof. Ramkaran Sharma, New Dehli

“Truthfulness as a Standard for Speech in Ancient India,” Prof. William Kirkwood, East Tennessee State Univ.

[Re]Dr. Wimal Dissanayake, East-West Center

June 18 CLOSING SEMINAR, Prof. George Kennedy

* [Re]=Response

教授が、silence と speaking には “revealing” と “concealing” の二面があり、東西に見られる相違はこの両者への力点の置き方の違いに因ると論じ、東洋では沈黙の持つ revealing 機能がより高いことを指摘した。これに対する私見を述べると、東洋の中でも日本、中国、インドの間では、沈黙の機能にかなりの違いがあり、日本は和を求めるあまり静的な沈黙が多いのに対し、中国・インドではかなり積極的かつ戦略的な沈黙が多いように思われる。これはむしろ西洋に見られる態度に近いものではないだろうか。

第四日目にはこの会議のコーディネーターでもあるテキサス大学の Jamiesen 教授が東西レトリックにおける比喻論を展開した。東西の古典文献に見られる比喻の類似と相違を、実例を引きながら説明した。例えば西洋では oratory を喩えるのに “火” がよく用いられる。この “火” は破壊を象徴しその背後には破壊と建設、存在の有無、善と悪という概念がある。一方東洋では oratory がよく “水” に喩えられ、“水” は常に流れ、未来永劫性、継続性を象徴するという。この比喻の対比にも、西洋の二価値思考と東洋の統合思想との違いが表われているように思えた。

四日目の午後は、レトリックと政治のテーマに移った。私にとっては最も関心のある分野であり、特にテキサス大学の Hart 教授による Carter 大統領の演説分析が興味深かった。Hart 教授は、1979年石油危機という国難に直面していた当時、国民に思慮深い行動と自省を求めた Carter の演説をとりあげ、これは米国の政治演説で多用される実際的な問題解決パターンから外れた、東洋的説教演説だと指摘した。従って、米国の基準から見れば Carter 演説は失敗作だが、東洋的には必ずしもそうとは断定出来ないと結論づけた。私自身この分析には共感を覚え、東洋からの他の研究者も同意見であった。

最終日には、古典レトリックの著作で高名な Kennedy 教授が一週間の総括を行ない、この会議を通して東西のレトリックに見られる多様性が再認識されたことと、共通の基盤をどこに見出すかが今後の課題であることを指摘した。私自身もこの一週間を通して、東西のレトリックに見られる異質性の中でいかに共通性を探求するか、すなわち “unity out of diversity” の模索が重要な課題であると感じた。と同時に、東洋の中でも多様性があることを再認識し、“東洋” と一言で一般化することは非常に危険であることを痛感した。そしてレトリックの伝統の長さ、底の深さ、幅の広さを改めて感じさせられた一週間でもあった。東西レトリックの多様性と共通性の探求が、異文化間の相互理解に役立つことを再認識して、ハワイから帰った。(文責：大谷)

米国における留学生事情

— NAFSA 40周年記念大会に参加して—

名古屋学院大学講師 小松 照 幸

5月30日から6月2日の四日間に渡り、ワシントン

D.C.において、NAFSA (National Association for Foreign Students Affairs: 外国人留学生協議会、会長：ミネソタ大学 Dr. Mestenhauer) 40周年記念大会が開かれた。留学に関する事務上の手続き、行政管理、第2外国語としての英語教育、異文化適応等について200以上の発表と16のワークショップが開かれ、海外からの出席者を含め約3,000人が一堂に会した。今回で5度目の参加だが、この記念大会への参加を通して見た、世界最大の留学受け入れ国、米国の留学生事情について少し触れたい。

まず、NAFSA は1948年に発足した、アメリカにおける、主に留学生の受け入れに関する担当者の全国組織である。留学業務に関する問題の改善を目指し、創立当初集まった関係者は88名で当時の外国人留学生数は約3万5千であった。その後、米国内の教育における国際化への意識高揚と世界の動向を反映し、留学生は急増。40年経った現在は約35万人に達している。同時にNAFSA 会員も6,000人を数える大組織に成長した。(参考までに諸外国における留学生数は、現在日本が22,000人、英国42,000人、西独74,000人、フランス129,000人である。) 留学生の増加に伴い、NAFSA も米国主導型から諸外国との相互依存型へと移行し、業務内容、関心事も多様化してきた。これはNAFSA 内の各部会の拡張にも反映されている。創立当初は“外国人留学生へのアドバイス” 部会だけであったが、順次“第2外国語としての英語教育” “外国人留学生・学者へのコミュニティーサービス” “行政管理部門” “米国人留学生担当者部門” が増設され、3年前には“海外における留学担当者会議” も加えられた。

今大会の特徴としては、各部会の質の向上と、教育プログラムをどのように充実させるかに強い関心が向けられてきた事があげられる。特に、アメリカ人学生の為の海外留学情報の整備と、外国人留学生に対する教育プログラムの見直しなどが目立った。前者については、アジア諸国、中でも日本に対する適切かつ正確な情報入手の方法がより具体的に求められ、留学生レベルだけでなく教育機関の交流も真剣に検討されてきた。この動きは、中等教育における“外国語教育” や社会科教育の“国際的カリキュラム” の必要性の認識なども影響を与えている。また種々な国際交流の中で、特に教育交流の重要性が認められつつある事も影響している。西海岸のある大学学長の話によれば、従来は貿易・経済・教育・文化の交流が個々別々に行われていたが、西海岸の各州政府においては5年程前から総合的な交流、特に教育交流を通して経済の活性化を計る方針を進めているそうである。ようやく本格的にアジアに目が向いて来た訳である。

一方、海外の留学担当者の声に耳を傾けるようになったのは、アメリカが諸外国との相互依存度を強めてきている象徴的な動向といえる。この40年間で、留学生の増加と共に送り出し側である海外留学カウンセラーの果たす役割がより重要で多岐にわたってきているという認識が生じている。これら海外カウンセラーの声は、米国の高等教

育に対する建設的な批評・批判を行っている。外国人留學生にとってアメリカの高等教育における academic relevancy (学問的妥当性) —— 米国での教育が帰国後充分活用されているか —— という点である。母国で生かせる仕事があればアメリカへの頭脳流出という結果を招く。例えば、人文社会系の学生は、出身国の文化・社会におけるモデルや社会的適応問題の違いが、アメリカ留学による成果の発揮に深くかかわってくる。

これらの問題は、送り出し国、受け入れ国両方の責任である。送り出し国はカリキュラム内容はもちろんの事、帰国後の留學生に対する進路への配慮も必要である。例えば、出発前に米国の教育内容について充分なオリエンテーションを行えば、多少とも留學生の心構えとして役立つであろう。またアメリカ側も送り出し国の事情ももっと精通していれば、留學生に対してより有効なカリキュラムの編成を行う事も可能であろう。捉え方によっては、諸外国のモデルやケースの導入が学問に広がりを持たせる事にもなる。このプログラムの見直しの声は、留學が“出発前”“到着後”“帰国後”の三時期に分けて考えられる際、従来は“到着後”のみの受け入れ問題が注目されていたのに対し、ここ数年はその前後の時期の重要性が見直されてきたといえる。この両時期はアメリカ側が余り関与しなかったところであり、海外の留學カウンセラーが初めて目を向けさせたといえよう。

以上、NAFSA 大会で特に感じた点をいくつか述べてみた。国際教育交流の重要性を認識することは、国際的なレベルで年々益々高まりを見せている。改善・解決されるべき問題は山積みされていて、より有効で意味のある留學・国際教育交流の推進は、今後の我々の課題である。

アメリカにおけるコミュニケーション研究の 動向とその広がり (2)

神田外語大学 野村直樹

今回は、ベイトソンの学問的な軌跡をたどりながら、特にコミュニケーション科学に対する重要な貢献、二重拘束理論 (Double-bind theory) に焦点をあててみる。

ニューギニアでの仕事を終えたベイトソンはマーガレット・ミードと結婚する。1936年、二人はバリ島で二年間の共同調査を行い「バリ人の民族性: 写真による分析」⁽¹⁾を著した。そこで、文化を記述する際、写真が言語を補い得る事を見事に実証した。見開き図版のひとつは「刺激とフラストレーション」と題され、9枚の連続写真で2分間にわたる母親と赤ちゃんとの行動を示している。二人の行動には、母親は赤ちゃんの反応を誘うように刺激するのに、赤ちゃんが反応するとそっぽをむいてしまうというパターンがみられる。ベイトソンとミードは、この交流パターンはバリ島では広く見られ、西洋社会ではやり取りが大詰めで進むのに対し、バリ島ではそれを避けている事を発見する。

バリ島におけるこの交流パターンの発見は、後年のベイトソンの理論にも大きく影響した。1950年代、ベイトソンは共同研究者らと共に、The Paradox of

Abstraction in Communication というプロジェクトに着手する。分裂病患者のコミュニケーションを録音や録画して分析し、二重拘束仮説が分裂病に関する理論として形成された。⁽²⁾この仮説によると分裂病は家族内のある種の相互行動と関連し、そこでは子供が「犠牲者」になる。この相互行動を二重拘束と呼んだ。二重拘束状況が生じるには、次の五つの材料が必要である。(1)二人以上の人間: 二重拘束を子供に課すのは普通母親であるが、時には父親、兄弟が組合わされることもある。(2)経験の繰り返し: 繰り返して経験することにより次回に対する心づもりが習慣となる。(3)第一の禁止命令: (a)「(b)いづれかの形式で、普通は言葉によって伝えられる。(a)「○○のことはするな。やったら罰を与える。」(b)「○○のことはやらないのなら罰を与える。」(4)より抽象的なレベルで矛盾する第二の命令: 一般的に姿勢や身振り、声の調子などの非言語的な方法で子供に伝達される。子供は矛盾があっても何も言うことが許されない。(5)犠牲者がその場から逃げ出せないようにすること: 母親から離れることは「生存」を脅かされることを意味する。

実際の例をあげてみよう。分裂病がかなり良くなった青年のもとに母親が見舞いに来た。喜んだ青年が思わず母親の肩に手を回したところ母親の肩は固くなった。青年が手をひっこめると母親は「かあさんのことをもう愛していないの」という。青年が顔を赤くすると、母親は「ねえ、そんなにすぐにどぎまぎしたり、自分の気持ちを恐れたりしてはいけないのよ。」と言った。その後2、3分しか息子は母親と一緒にいられず、母親が帰ってから看護人に暴行し tubs に入れられた。⁽³⁾

バリの母親の場合、矛盾するメッセージを送り(a)ある時点では子供を刺激し(b)数秒後には興味もなく背を向けることにより刺激した動機を否定した。分裂病患者の母親も(a)非言語的には息子を拒絶し(肩の緊張)(b)言語的には「かあさんをもう愛していないの」と愛を訴えた。これらは微視的には似ているが、結果は大きく異なる。一方は不適応と精神病的反応であり、もう一方は文化的に標準とされる行動である。両者の間にはコミュニケーションの枠組みとなる文化的背景の違いがあると言える。

二重拘束説があてはまるのは、分裂病の場合だけに限られない。誰でもあい矛盾するメッセージに直面すれば、二重拘束状態に陥る可能性はある。二重拘束説の最大の貢献はコミュニケーションにおける逆説と抽象性の階層の存在を指摘したことにある。人間のコミュニケーションには、抽象性のレベルが少なくとも二つある。ひとつはメッセージの内容を「報告」することであり、もうひとつはある特定の間人間関係を「命令」することである。たとえば「車が来るよ」と言ったとしよう。この発言は、出来事についての「報告」であると共に、ある行動を起こせという「命令」でもある。「命令」の方が抽象性が高いため、「報告」メッセージの枠となる。二つのレベルのメッセージが矛盾する時に、逆説が生じる。例えば、もしここで「私がこの文章で述べたことは全部嘘です。」と発言すると論理的逆説が生じるだろう。もしこの発言

が本当ならば私の論述は、この発言も含めて嘘である。しかし私の論述が全部嘘なら、嘘だという発言が真実を言ったことになる。そうして、もし本当ならば嘘であり、嘘ならば本当であるという逆説が無限に循環することになる。

分裂病の息子が置かれたのは論理上の逆説ではなく、言葉とそれを発している人の関係から生じる逆説、つまり母親の非言語的メッセージ（肩の緊張）が言語的メッセージ（「私のこともう愛していないの。」）と矛盾することによる二重拘束であった。息子は、一つのメッセージを確認するにはもう一方のメッセージの意味を否定しなければならないという無理な立場に置かれている。しかし、次の瞬間には彼の確認したメッセージは母親によってなしくずしにされる。そこで彼が生きのびるには、分裂病的コミュニケーションの無限の渦に適応するほかはない。否定が確認となり、確認が否定となる渦である。

コミュニケーションの分野に「抽象性の階層」と「逆説」という重要な概念を初めて持ちこんだベイトソンは、今日、対人関係や心理学、精神医学などに測り知れない影響を与えている。

- (1) Bateson, G. and M. Mead. 1942 Balinese Character: a photographic analysis. NY: New York Academy of Sciences. (2)(3) Bateson, G. 1972 Steps to an Ecology of Mind. NY: Ballantine. (4) Ruesch, J. and G. Bateson. 1951 Communication: the social matrix of psychiatry. NY: Norton; Watzlawick, P. et al. 1967 Pragmatics of Human Communication. NY: Norton.

研究所活動報告

Role of Public Speaking in the U.S. Universities

6月9日、ミネソタ大学スピーチ・コミュニケーション学部のJensen教授を招いて、アメリカの大学におけるパブリック・スピーキングについてのセミナーを開いた。

Jensen教授はBritish Rhetoricが専門であるが、3年前からはAsian Rhetoricにも取り組んでおられる。講演では、まずスピーチ・コミュニケーション学部の変遷に触れ、1920年代英文学部から修辞学の研究者が独立し、その後、より幅広く人間のコミュニケーションに対しての関心が起こり、対人・小集団・組織内等のレベルでの研究が進み、1960年代に異文化コミュニケーションにも眼が開かれてきたと、概説された。

パブリック・スピーチ研究に関する最近の傾向として倫理への関心、古文書を基にした研究、Women's Rhetoric研究の誕生を指摘され、新しい雑誌として“Rhetorica”(International society for the history of rhetoric 発行)“World Communication”,そしてInternational Listening Associationの発会を挙げられた。

米国人学生にAsian Rhetoricを教える難しさとし

ては、アジア全般に対する知識不足を指摘されたが、学生も非常に意欲的に取り組んでいると報告された。

Information Board

Joint Study Facilitators' Workshop (異文化間トレーニング専門家の為の実践講座)

講師: Dr. Brad Simcock (産業社会学), Elizabeth Lokon (異文化間コミュニケーショントレーナー)

日時: 1988年7月23日(土), 24日(日) 10時~5時

場所: 国際文化会館 (東京・六本木)

費用: 3万9千円

問合せ: Dr. Brad Simcock

Tel 0266-53-4724 or 03-581-6092

第14回 JALT 国際大会

“Language and Cultural Interaction”

日時: 10月8日(土)~10日(月)

場所: 神戸・国際交流会館 (ポートアイランド)

問合せ: JALT 事務局 Tel 075-221-2376

(JALT = The Japan Association of Language Teachers)

JAFSA 創立20周年記念国際シンポジウム

JAFSA (外国人留学生問題研究会) は創立20周年を記念し「世界から日本へ・日本から世界へ —— 21世紀の国際教育交流に果たす日本の役割をもとめて —— 」と題して国際シンポジウムを開催予定。

日時: 1988年10月26日(水), 27日(木)

場所: 東京大学山上会館

後援: 文部省, 外務省ほか (予定)

問合せ: 早稲田大学国際交流センター内 JAFSA 事務局
Tel 03-203-4141 内線2133

第22回異文化コミュニケーション講演会

『フランス: その心と私たち』

講演者: 辻 邦生 (随筆家, 学習院大学教授)

日時: 10月14日(金) 6時20分~8時20分

場所: 神田外語学院

(JR もしくは地下鉄神田駅下車徒歩3分)

入場料: 800円

問合せ: 当研究所 Tel 0472-73-1233

読者の皆様へ

読者の皆様からの推薦図書, 研究, ご存知のセミナー, 研究等がございましたらお知らせ下さい。また, 皆様の貴重なアドバイスをもとに少しでもお役に立つものを創りたいと望んでおります。どうか忌憚ないご意見を下記までお寄せ下さい。

神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所

〒260 千葉市若葉1-4-1 Tel 0472-78-1233

Fax 0472-77-1777